

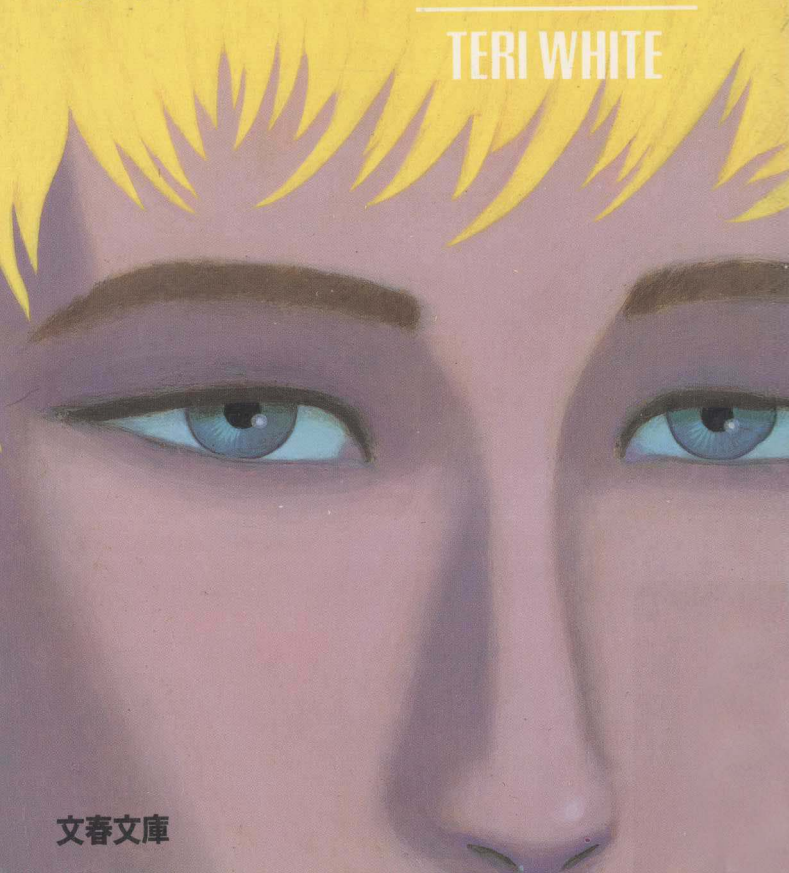
木曜日の子供

THURSDAY'S
CHILD

テリー・ホワイト
村松 潔 訳

TERI WHITE

文春文庫





文 春 文 庫

THURSDAY'S CHILD

by Teri White

Copyright © 1991 by Teri White

Japanese language paperback rights reserved by Bungeishunjo Ltd.
by arrangement with Sobel Weber Associates Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

木曜日の子供

定価はカバーに
表示してあります

1991年9月10日 第1刷

著 者 テリー・ホワイト

訳 者 村 松 潔

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-752714-6

江苏工业学院图书馆

蔵書の章 供

村松 潔 訳



文藝春秋

この本は娘に

木曜日の子供は旅に出る。

——伝承

振り返るな。なにかに追いつかれてしまうかもしれない。

——リーロイ・"サッチェル"・ペイジ

木曜日の子供

主な登場人物

ロバート・ターチエック	殺し屋
アンディ・ターチエック	ロバートの弟
モーリソン・トラヴァース	ロバートのガールフレンド
ダニー・ボイド	アンディの仇敵
ソール・エプスタイン	映画界の大立者
ポー・エプスタイン	ソールの孫
ギャレス・シンクレア	私立探偵
ミッキー・ダンカン	ギャレスの同居人
ウォリー・ディクソン	警部補 ギャレスの元同僚

このどうしようもない町全体がカリカリしている。

「あたしに言わせれば」と、ラジオで金切り声の女が言った。「レイプするような男はひとり残らず通りにひきずりだして、モノをちゃん切ってやればいいのよ。錆びついたピンキング・バサミでね。そうすれば、少しは思い知るでしょう」

聴取者参加番組の（男の）司会者は、わざとらしい苦痛のうめき声をもらして、電話を切った。それから、こういうことを言う女は、男のモノにどんなに長らくごぶさたしているかわかりやしない、と利いたふうな皮肉をとばすと、すぐに調子のいいキャットフードのコマーシャルにつないだ。

ロバート・ターチェックは手をのばして、苛立たしげにラジオのスイッチを切った。彼の気分もほかの連中と少しも変りがなかった。少なくとも、このサンタ・モニカ・フリーウェイの

渋滞に巻き込まれている連中とは。こんなにみんなが苛ついているのは、暑さのせいにはちがいない。南カリフォルニアの住人なら、このいまましい気温逆転層にもそろそろ馴れていいころなのに——この地域の上空に入りこんで、汚れた熱い空気をすっぱり閉じこめるこの逆転層ときた日には、一度やってくるとなかなか動かず、ときには何日も居坐りつづけるのだから。だが、どうやら、みんなちっとも馴れていないようだった。その証拠に、だれもかれもがカリカリしている。

おれが人一倍むしゃくしゃしているのは、とロバートは思った、これからやろうとしている仕事があまりにもけちくさいからだ。大仕事のためならいざ知らず、せいぜい家賃の足しにしかない退屈な仕事のために、こんな四車線の駐車場みたいなところに閉じこめられているからだ。

現実映画のスクリーンで見るとは大違いで、彼の生活にはスリルもなければサスペンスもなかった。ほとんど毎日、くそ面白くもない仕事を黙々とこなしているだけなのだ。

もちろん、彼のお得意さんのなかには、『フォーチュン』の企業番付ベスト五〇〇社に入るような一流企業の役員タイプもないわけではないわけではない。けれども、この日の午後のお客さんは、そんなものとは縁もゆかりもないやからだった。彼の行き先はベヴァリー・ヒルズではなく、イースト・ロサンジェルスだったのだ。くそ、なんともわくわくするじゃないか？ 運よく目的地にたどりつけば、じつについてない男——掛け値なしのドジ野郎——アーネスト・ギャロスという競馬気違いのねぐらに踏みこむことになる。アーニーが馬をメシの種にしているの

は事実だが、勝ち馬を当てられなかったぐらいでは、ロバートが登場することはなかったろう。こう見えても、カリフォルニア州に五万という安っぽい馬気違いの勝ち負けに、いちいちかかずらっているほどケチなチンピラではないのだから。

いやはや、アーニーの野郎はとんでもないことをしてかしてくれた。今度ばかりはとてつづいてなかった。では済まされまいだろう。

ドジな男は、やけになると、よけいドジなことをする。借金を清算するために自分のボスの金をちょろまかすなんて。しかも、不思議なほど負け馬を引き当てる才能に恵まれた、この見込みのない不法入国メキシコ人にとってあいにくなことに、ボスはそういうことを大目に見る人間ではなかった。というわけで、ロバートの出番になり、こんな交通渋滞に巻き込まれるはめになったのだ。

ぞっとするフリーウェイをやったのことで脱出すると、ロバートはアーニーの住む陰鬱な地区に向かった。長い赤信号を待っているとき、ふたたびラジオをつけ、デジタル・ボタンを押して、モーツァルトらしい音楽を流している局を見つけた。ほんとうにモーツァルトの曲かどうかは知らないが、ともかく、いまの気分にはぴったリだ。彼は思いきりヴォリュームを上げた。

それから、わずか数分後、アーニーのいちばん最近の住所にたどりついた。なんてむさ苦しいところなんだ。そう思いながら、ポール・グレイのサーブをうらぶれた長期滞在者用ホテルのまんまに停める。同じような連中と何度も付き合っていると、ときには、ほとほと嫌気が

さす。すでに何回となく、彼は本気でそういう連中を助けてやろう、もっと穏やかに事を解決してやろうとしたものだった。下手をすれば、仕事の依頼主の機嫌を損ねかねなかったにもかかわらずだ。だが、たとえ期限を延ばしてやっても、たいていはなにひとつ変らなかった。負け犬は負け犬であり、どこまでいっても、負け犬なのだ。

このアーニー・ギャロスにしても、ドジなメキシコ野郎なりの良識が少しでもあれば、どうにメキシコに逃げ帰っているはずだ。それなのに、いまだにこんなところでぐずぐずしているなんて、あいた口がふさがらない。まるでおれの登場を請い願っているようなものじゃないか。ともかく、いま、やつはここにいる。

このあたりは、たとえ真つ昼間でも、利口な人間が武器も持たずにこのこ入り込むような場所ではなかった。そんなことをすれば、たちまち頭のいかれた連中に襲われるか、チンピラに襲撃されるにきまっている。ロバートは無意識に脇の下のホルスターに手をやって、肌身はなさぬマグナムの重みを確かめた（実際には、射撃場以外では、こいつを使ったことはなかったが）。こいつがあれば安心だ。彼はシートの下に手をのばし、安物の銃と手製のサイレンサーを取り出すと、上着のポケットに突っ込んだ。

ちくしょう、アーニーのやつめ、自分がどんな危険を冒しているか知らないはずはないだろうに。いったいどうしてこの国からずらかなかったんだろう？ もちろん、これまですでに何回となく、ロバートはやつを助けてやった。だが、やたらに情けをかけすぎれば、しまいはわが身に火の粉が降りかかってくるだろうし、ヘタをすれば生命がない。そんなにまでして

人助けをするつもりは彼にはなかった。

胸のなかでもう一度それを確認すると、ポケットのうえから銃を軽くたたいて、車を出た。ドアはいちおうロックしたが、最近では、どんなところに停めようと、ロックはほんの気休めにしかならなかった。わずかに救いがあるとすれば、彼の車に手を出すような間抜けなやからは、早晚それを——心から——後悔するはめになるということだ。だが、どうやらチンピラどもはそれを弁えて（わきま）いるらしい。連中はかならずしも見かけほど馬鹿ではない。もちろん、見かけどおりの馬鹿がいはいわけではないけれど。

通りの左右をさつと見てから——目にとまったのは早々とくりだした売春婦がひとり、まだぐずぐずしているヤクの売人（バイナ）が二、三人だけだ——ロバートは古い建物に入ってしまった。

建物の管理人はシルヴェスターという元ボクサーだった。最後まで芽が出なかった現役時代、あまりにも長年数えきれないほど頭を殴られたおかげで、シルヴェスターはいつもちよつとピントがずれていた。彼はおもむろに手をとめると、ロビーの端から、人のよさそうな、ぼんやりした顔をロバートに向けたが、やがてまた驚くほど精力的にリノリウムの床を掃きはじめた。大量のエネルギーをいたずらに浪費しているように見える。実際、彼はゴミを一カ所から別の場所に移動しているだけだった。緑色のワークシャツが汗で黒くなっている。だれかが注意して、もつとのんびりやらせてやらなきや、この馬鹿はじきに心臓発作を起こすにちがいない。けれども、それはロバートの知ったことではなかったし、シルヴェスターのほうも、ちよつと頭がいかれているとはいえ、ロバートがここになにをしにきたにせよ、彼がくちばしを挟むい

われはないことを理解できないほど能なしではなかった。彼は箒ほうきのうえに身をかがめて、調子はずれの口笛を吹きはじめた。

アーニーの部屋は二階だったが、こういう建物のエレヴェーターがちゃんと動くはずはなく、階段のカーペットはすりきれて、染みだらけだった。こんなところに住んでいれば、落ちこまずにいるのは至難の技だ。

ロバートは、白い麻のジャケットの袖が汚い壁にさわらないように注意した。よりによってこんな日に、新しいジャケットを下ろすんじゃないかと思った、とは思ったが、いまから後悔しても手遅れだった。しかし、うまくいけば、なんとかこれを台無しにせずに用事を片付けられるかもしれない。

二階の廊下には、小便とファーストフードと数世代にわたる人間の汗の匂い——さらにそのどれとも言えない、得体のしれない匂いが染みついていた。ロバートはあまり深く息を吸わないように気をつけた——こんな空気をまともに吸いこんだら、どんな病気に感染するかわかりやしない。

めざす部屋のまえにいくと、2Dと記されたドアを拳骨でたたいた。

「だれだい？」閉じられたドアの向こう側で、ためらいがちな返事があった。警戒するのもむりはない。アーニーがいくら間抜けでも、自分が崖っぷちに立たされていることを知らないはずはないのだから。

「あけるんだ、アーニー」ロバートは少しも声を荒らげなかった。穏やかな口調を保ったほう

が、雑魚^{ざぎょ}どもを震えあがらせるには効果がある。この商売で成功するためには、そういう心理的なかけひきがものをいうことを、彼は経験から学んでいた。なんといつても、彼はわずか五フィート十一インチしかなかったし、ガリガリだとは言わないまでも、堂々たる体軀にはほど遠く——たとえ銃をにぎっていても——黙って立つだけで人を怖^{おそ}じ気づかせるわけにはいかなかったからである。そのうえ、やっかいなことに、たいいていの人が彼の顔立ちにだまされた。肌が白く、かすかにソバカスがちらばっていて、緑色の目にはどこかぼんやりしたところがあり、頭はもじやもじやで、ほとんど赤毛にちかかった。おかげで、しばしばあまくみられた。以前、あるガールフレンドは、彼を評して、ノーマン・ロックスウェル描く『サタデイ・イヴニング・ポスト』の表紙に出てくるボーイスカウトの少年みたいだと言ったものだった。

結局、彼はひとつの単純なテクニクにたどりついた。冷静を、冷やかさを保つこと。そうすれば、やつらを心^{こゝろ}から震えあがらせられる。重要なのは態度なのだ。

ドアの背後は静まりかえっていた。あまりにも静かで、アーニーの思考が地虫^{ぢむし}みたいにぶるぶる震えて、必死に逃げ道を探している音が聞こえるような気がする。さいわいなことに（アーニーではなく、彼にとつて）、ここは二階だった。さもないければ、この泥棒ネズミはどうに窓から逃げだしているだろう。

「さっさとドアをあけないか、アーニー」ロバートはちよつと苛立ち、不機嫌になったが、それでも穏やかな口調をくずさなかった。薄汚いアーニーがまるで若い女でもあるかのようなベッドに誘うあまい言葉のような口調だ。